

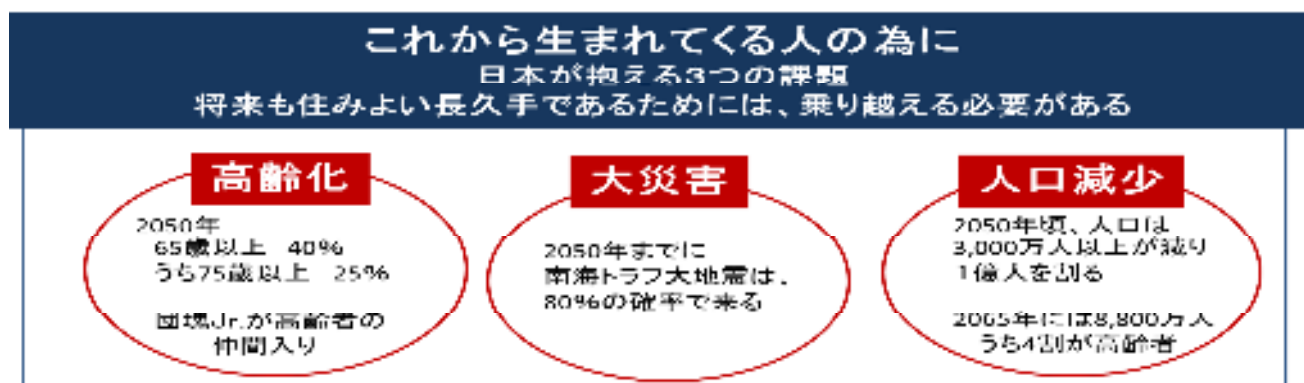
平成30年10月18日から2日間、第1回地域共生社会推進全国サミットが、本市主催で行われます。参加費が必要な行事ですが、広く市民にも聞いてもらいたいため、長久手について語る「分科会C」は、市民に無料開放することにしました（既に参加申込は、締切っています）。

「分科会C」のタイトルは、「長久手でやってみただけど、うまくいかないこと」。なぜ、市民のみなさんに聞いていただきたいのか、サミットを前に市長が話した内容です。

これから生まれてくる人の為に

今、便利な暮らしと引き換えに失った「つながり」を、もう一度、作り直す必要があると考えています。

それは、日本が抱える3つの課題「高齢化」「大災害」「人口減少」を乗り越え、将来にわたっても、住みよい長久手市であるためです。



長久手市は、昭和40年代から、土地区画整理事業を中心にまちを整備してきました。より便利な暮らしと引き換えに、「みどり」と「つながり（共同体）」を奪ってきたとも言えます。

わずらわしくとも「つながり」があった貧しい時代は、手元にお金がなく、人にしか価値がありませんでした。嫁と姑がイガミあっても、近所同志でもめても、自分一人では農作業や地域のことはできないため、助け合う必要がありました。家族、地域といった共同体を運営するには、何でもかんでも白黒ハッキリさせては、上手くできませんでした。人にしか価値がなかった時代は、ケンカをしても、根底の部分では互いを信頼し、支え合うしかありませんでした。それは、わずらわしくとも、互いに少しずつ我慢して譲り合う「雑木林の価値観」(*1)であったように思います。

(*1) 「雑木林の価値観」

雑木林は、①さまざまな木が、さまざまな有り様で暮らしている。②少しずつみんな我慢している。③いつも未完成。

今は、お金さえあれば困り事は何でも解決できると考える人が増え、何でも白黒ハッキリさせないと気が済まず、「困ったことはお金で解決」「困ったことは行政にお任せ」という風潮が、特に都市部では強いように思います。しかし、「困ったことはお金で解決」できない時代が、すぐそこまで来ています。

例えば、高齢者が慢性的な病気で長期入院が必要になったとき、市内にある愛知医科大学は急性期医療が中心なので、受け入れてはくれません。市内には入院施設は、もう1カ所しかありませんが、国の方針で、これ以上入院ベッド数は増えません。在宅で治療しようと思っても、訪問してくれる介護者、ヘルパーの絶対数が不足しています。お金を払っても、来てくれる人がいません。お金だけでは解決できないのです。

長久手市内には、一人暮らしの高齢者が約2千人、高齢夫婦のみの世帯が約800世帯いらっしゃいます。在宅介護も、でき辛くなっていくでしょう。

長久手だからこそできること

「つながり」をつくる。

東京のような大都市ではできないことです。長久手の規模だからこそできることだと思っています。

今、市では、「つながり」をつくるための一つ的手段として、他人どうしの市民が知り合ってもらうための場を、驚くほどたくさん設けています。計画づくりや居場所づくり、小さな単位でのまちづくり等です。地域においても、「つながり」をつくろうと苦労を重ねています。小学校区ごとでの市内一斉防災訓練やまちづくり協議会の設立等です。伝統の祭りを守るために骨折りいただいている方もたくさんいらっしゃいます。

地域の人達が、「つながり」をつくるために、顔を突き合わせ、共に苦労する。そうしたことを繰り返すことで、まちへの愛着が生まれます。子ども達も、そうした大人達を見て育つことで、進学や就職で長久手を離れても、ここが故郷であり、ここに帰って来ようと思うのではないのでしょうか。つながりも愛着もなければ、東京でも大阪でも、どこで暮らしていても一緒です。

「共生」とは、相談する。一緒に考える。一緒にやっていくことです。

ごちゃまぜであり、ゆっくり、大らかでないと「共生」はできません。

会社の価値観では、「早くやる」、「きっちりやる」ことが一番で、会議で意見を言わない人には価値がありません。

この価値観では、「共生」はできません。

一方で、行政の仕事の中でも、暮らしを対象にした計画づくりや居場所づくりは、参加しないからダメではなく、参加を呼びかけ、待つことができます。ワークショップで意見を言わないでも、そこに座っているだけで「楽しい」と思う人の参加も大歓迎です。「早くやる」、「きっちりやる」といった会社の価値観だけの世の中では、居場所がなく、さびしい思いをしている人も大勢います。

便利な生活と引き換えに、50年前からわずらわしい「つながり」を切り捨ててきた長久手において、「共生」が一朝一夕でできるはずがありません。それでも、相談し、一緒に考え、一緒にやっていくことを繰り返す中で、自分たちのまちを一緒に作る面白さを、一人でも多くの市民に感じてもらいたいと思っています。

分科会Cのタイトルは、あえて「長久手でやってみただけど、うまくいかないこと」としました。

今だけを切り取れば、「うまくいっていない」という評価かもしれません。しかし、確実に、市民が、地域が、動き出しています。一例として、「みんなで作るまち条例」の「まちうた」があります。「まちうた」の最後は、こう締めくくられています。

♪やさしいことではないけれど

今ある暮らしをもっと良く キラキラ光る長久手を

今日の市民がつくるため 明日の市民に渡すため♪

こんな歌を、行政ではなく、大勢の市民のみなさんが、まちへの思いを込めて作ってくださいました。今、長久手は間違いなく、「共生」に向かって前進しているのです。

今回のサミットを通じ、長久手が目指す方向は間違っていないこと、そして、長久手は前進しているんだというメッセージを市民のみなさんに伝えられたらと思っています。